

絹本着色 江戸時代(十八世紀)
本紙各九八・九×四〇・八

柳沢淇園(一七〇四―五八)は、將軍綱吉の側用人・柳沢吉保の家老であった柳沢保格の次男として誕生し、幼い頃より書画、儒学、能や俳諧、天文学などに接して学び、文武諸芸に通じた人物である。画は、長崎派の画師・渡辺秀石(一六三九―一七〇七)の門人である吉田秀雪(英元章、生没年不詳)に学んだが、これは、柳沢家に集う学者や文人等との交流によって中国の文物に接する機会も多く、画も中国画を学ぶべきと考えたことによる。本図においても、描かれる器物、彩色、描法に、中国画や長崎派の影響が強く感じられる。そして、茶道や華道にも造形の深かった淇園は、花や果物を花器や籠などと取り合わせて描く花果籠図に個性を発揮するようになる。主題の花や果物、花器や籠の描写を丁寧に彩色描写し、背景を全く描かず余白として生かした淇園の花果

籠図は当時より大変人気があったようで、淇園の後も多く同様の図が描かれた。

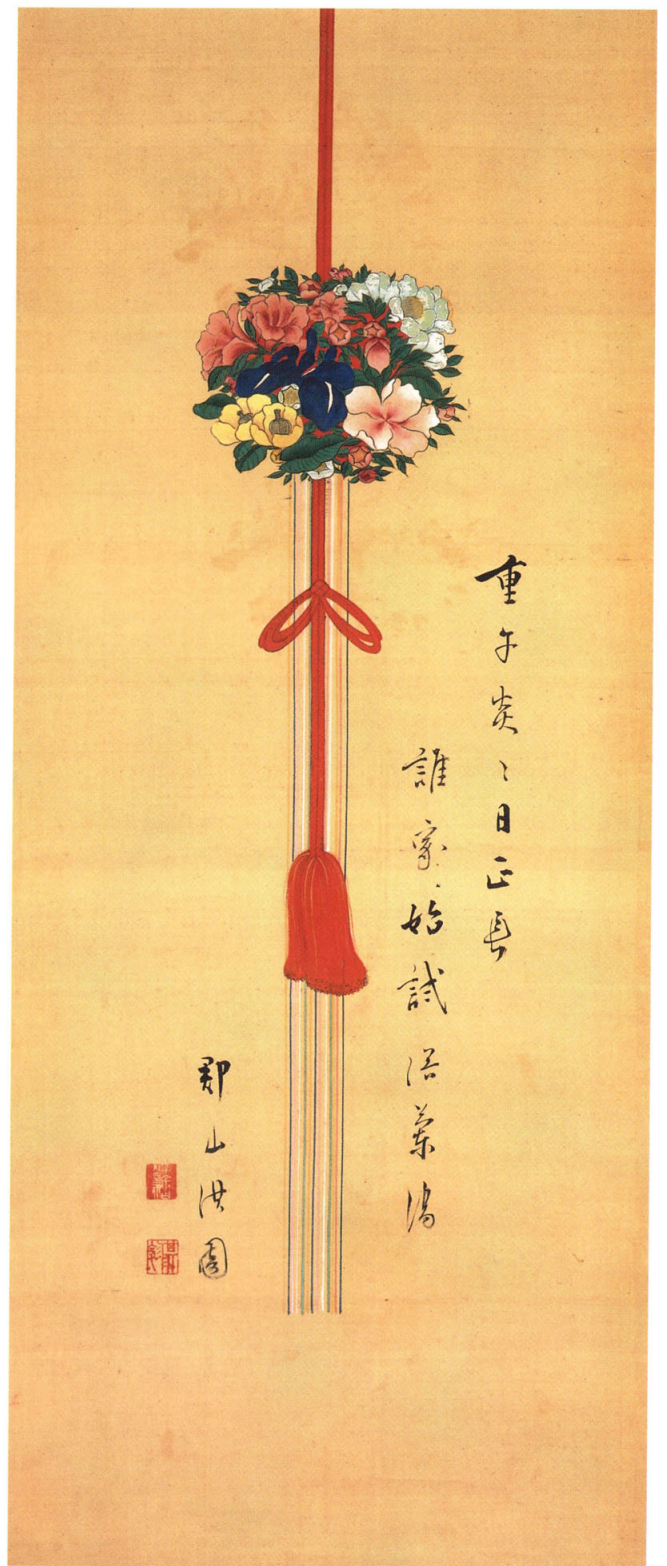
本図の画題は、旧暦の正月七日の人日の節句、五月五日の端午の節句、九月九日の重陽の節句に因むものである。正月七日は七草粥を食べ、五月五日は薬玉を掛け、九月九日は菊酒を飲んで、それぞれ邪気を払うという古くからの風習を、それぞれの詩と共にこれらの図の中に美しく描き込めた。正月幅は唐草文六角六足青磁鉢に白梅と福寿草、五月幅には菖蒲を中心に躑躅や白椿などがまとめられ朱房と五色の糸で飾り吊られる。また九月幅は朱色の編籠に梨の実、石榴、薔薇等が盛りだくさん。花、葉、樹などの描写が、鮮やかな色彩を用いながら、その濃淡や暈かしを巧みに用いて、表情豊かに、丁寧に描かれ、華やきの図となっている。



正月



九月



五月

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

花鳥―愛でる心、彩る技（若冲を中心に）

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 40

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成十八年三月二十五日発行

©2006, The Museum of the Imperial Collections